

「学位請求論文（論文博士）」審査報告書

令和4年10月8日

学位請求論文（論文博士）審査報告

学位請求論文： 5文型の史的研究—統語分析が誕生してから文の公式が提唱されるまで
学位請求者： 日本大学工学部教授 川嶋正士

審査委員

主査	専修大学文学部教授	田邊祐司	㊞
副査	専修大学文学部教授	岡部玲子	㊞
副査	神戸大学人文学研究科教授	岸本秀樹	㊞

審査報告

本論文は、英語を理解するための手がかりのひとつである英語の5文型について、その成り立ちから日本に移入され、普及に至るまでの変遷過程を明らかにすることを目的とする。

日本の英語教育において5文型は現在でも人口に膾炙しているものと思われるが、海外では、これを用いた文法／英文構造理解の指導を行っている国・地域は皆無であるという事実は意外と知られていない。5種の文型だけで英語を正しく理解、記述できるのか、また文型に依存する文法指導は妥当かなどの議論はこれまで数多くあるが、肝心の5文型という統語分析がいつ、どのようにして生まれ、いかにして日本に移入され、今日の形となったのかについての研究はほとんどない。全7章から成る本論文はこうした英語文法史研究の未解明の領域に光をあてたものである。

第1章は問題意識と本論文の目的に係る4つのリサーチクエスチョン（以下 RQ）を提示した序章である。

- RQ1 統語分析の誕生からそれが英文法に適用された過程
- RQ2 Forms of the Predicate 誕生の目的、背景、およびその後の経緯
- RQ3 統語分析の日本移入とその発展過程
- RQ4 細江の「文の公式」の提示とその背景

第2章ではRQ1に答えるべく、5文型の祖型となった Forms of the Predicate が提唱される以前の統語分析が英文法にどのように応用されたのかの経緯がまとめられている。

第3章ではRQ2を扱い、5文型の祖型が1880年代後半にギリシャ語、ラテン語、フランス語、ドイツ語、英語を同一の視点から記述した Sonnenschein 編集の「並行文法シリーズ」において見られることが突き止められ、さらにその祖型が破棄された経緯と理由が時代背景と関連付けて論じられた。川嶋氏はここで Sonnenschein が古典語の地位を守るためにラテン語文法の体系を基盤とした祖型を基底に据え、統一された文法用語を用いることで多くの言語を学習する際の負担が軽減されるとの意図があったことを論証した。

視点を日本に移した第4～5章では、RQ3をテーマに日本国内で5文型が提示されるまでの統語分析の変遷を精査した。英国においてすでに祖型は破棄されたのにもかかわらず、なぜ5文型が日本に導入され、現在まで命脈を保っているのかに川嶋氏は疑問を抱き、その問題意識がこの2章を貫いている。

まず、第4章では1880(明治13)年代から輸入された英文法書に影響を受けた国産の英文法書を精査し、その結果、この時期の統語分析では、補語のうち主格補語しか示さない初歩的なものが流行し、本格的な統語分析は認められないことを示した。

続く第5章では1890(明治23)年代末期から国産英文法書において統語分析が成熟し始め、現行の5文型とは異なる順序や編成の文型、5文型から第4文型を引いた4文型による分析が示されたことなど、5文型普及前の時代の流れをつまびらかにした。

第6章ではRQ4を取り上げ、国産英文法書において初めて5文型を紹介した細江逸記の科学的文法観と規範的文法観を示し、二元的文法観を以て英文法を研究した理由と目的を明らかにした。日本で用いられる現行の5文型は細江が1917年に刊行した『英文法汎論』の中で記述した5種の「文の公式」を淵源とするが、いきなり5文型が提示されたのか、それとも5文型の誕生に通じる統語分析が熟成する過程があったのかに関して川嶋氏が示した知見は英文法史における嚆矢であり、本論文の価値を高めている。第7章は終章であり、本論の総括である。

このように5文型、統語分析という縦軸が貫く本論文は、文法理論を専門とする川嶋氏が欧州での統語分析の変遷のみならず、それがどのように日本に移入され、いかにその後の流行につながったのかという経緯も明らかにしたクロス・オーバーな史的研究であるといえる。現在の学校教育における英文法指導において教義とされる5文型の成り立ちについて、海外の源流地点にまで遡上し、そこから日本に移入された過程に光をあてた視点は独自のものであり、英語文法指導の今後に裨益することは間違いないであろう。

近年の学習指導要領ではコミュニケーションへのパラダイム転換が叫ばれ、文法事項、文法用語などを用いずに英語を指導するという形にシフトした感があるが、果たしてそれで良いのであろうか。また、学校教育における5文型、統語分析はどうあるべきであろうかなど、川嶋氏には今後とも歴史研究を続けられると同時に現行の文法指導に対しても積極的な提言がなされることを期待したい。

以上、審査の結果、博士の学位を授与するに値する論文と判定する。